

【岐阜】「患者の質問に答えられるようになった」肺癌ガイドブックが医療者に好評-澤祥幸・岐阜市民病院がん診療局長に聞く◆Vol.2

2022年1月28日 (金)配信 m3.com地域版

肺癌と診断された患者の悩みや不安にこたえるべく、治療の最新情報を含めてアップデートされた『患者さんのための肺癌ガイドブック』第2版が2021年11月に発行された。医療関係者からは「患者からの質問に答えられるようになった」と好評だという。同書の作成委員長を務めた岐阜市民病院がん診療局長（がんセンター長）の澤祥幸氏に内容や活用のメリットについて聞いた。（2022年1月7日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



出版に携わった澤祥幸氏（左）と薬剤部の大澤友裕氏

——『患者さんのための肺癌ガイドブック』第2版に反映した、肺癌治療の最新情報について教えてください。

肺癌の診断法、治療法は著しい進歩を遂げています。今回出版した第2版では、現在、非小細胞肺癌の治療薬として認められている免疫チェックポイント阻害剤のPD-1抗体（ニボルマブ、ペムブロリズマブ）、PD-L1抗体（アテゾリズマブ、デュルバルマブ）、CTLA-4抗体（イピリムマブ）について掲載しています。2020年末にニボルマブとイピリムマブの併用療法、およびこの併用療法とプラチナ製剤とそのほかの抗がん剤を組み合わせた治療が初回治療として承認されました。併用療法は組み合わせによって効果や副作用などがさまざま、医療従事者だけでなく患者さん側も情報のアップデートが必要です。

非小細胞肺癌に対する分子標的治療薬としては、EGFR、ALK、ROS1、BRAFのほか、新たに承認されたNTRK、RET、MET阻害薬、血管新生阻害薬についても本書で触れています。毎年のように新たな分子標的治療薬が承認されている状況ですので、情報を更新していくことが欠かせません。本書では、巻末の「肺癌治療に使用される薬剤一覧」でこれらの最新薬剤も含めて紹介しています。

加えて、第2版の副題にもあるように、希少がんである悪性胸膜中皮腫、胸腺腫瘍についてもページを割きました。これらのがんについては患者向けの情報が非常に少ないので、それを補いたいという意図からです。

新しい診断法や治療法、薬剤に関する情報を含めて、常に最新の情報を患者さんにもお伝えるために、『患者さんのための肺癌ガイドブック』は書籍のほかにWeb版をご用意しています。書籍は2年に1度の発行が限界なので、第2版発行の1年後を目安にWeb版のアップデートを行う予定です。Web版は、日本肺癌学会のホームページに掲載しますので、どなたにもご覧いただけます。

——『患者さんのための肺癌ガイドブック』の活用は医療従事者にとってどのようなメリットがありますか。

患者さんが肺癌と診断された後の2週間は、うつ状態になる方が多くいます。2週間ほどで心が落ち着き、前向きに治療に取り組む患者さんが多い一方で、精神的なショックから立ち直れずに治療から逃避してしまう患者さんがいることも事実です。そうしたとき、医師や看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーなどがチームとなって患者さんをサポートして解決できればいいのですが、このようなサポートがどの病院でも同じレベルで行えるわけではありません。

本書は肺がんの検査、診断、治療という「パーシエント・ジャーニー」に沿って構成されていて、肺がん患者さんの多くが抱える「これからどうしたらいいのか」「どう治療すればいいのか」という大きな不安、悩みに寄り添う内容になっています。特に診断後の2週間は、前述した通り患者さんにとって非常に大切な時期。そのときに本書が身近にあれば、患者さんやご家族に寄り添い、安心感をもたらすことができるはずです。皆様の病院の待合室に本書を置いていただくようおすすめしたいですし、肺がんと診断された患者さん一人一人に持っていただき、診察までの待ち時間などに読んでいただきたいと思いますね。

また、本書は看護師やがんに関する相談員の方など、さまざまな医療スタッフの方から反響をいただいております。「この本のおかげで、患者さんの質問に答えられるようになった」「肺がん治療の全体像について理解が深まった」といった声も届いています。がん治療はチーム医療ですから、幅広い職種の方にご一読いただきたいと思います。



患者さんのための肺がんガイドブック第2版

——がん治療に関して、岐阜県の特徴を教えてください。

ホスピスや緩和ケア病棟は今でこそ全国各地にあります。岐阜は全国的にも見ても早い段階でホスピスを導入した県です。岐阜にホスピスをつくらうという市民活動を背景に、1999年、岐阜清流病院に県内初のホスピス病棟が誕生しました。この頃から、岐阜県内では患者さんのQOLの維持・向上を目的としたさまざまな活動が行われています。本書でご紹介したような緩和ケアを実践しやすい環境であり、これは岐阜の特色のひとつです。また、岐阜市を中心に「患者の会」の取り組みも活発です。

一方で課題としては、肺がんの手術ができる病院、医師の少なさが挙げられます。肺がんの手術ができる病院は岐阜医療圏には五つありますが、飛騨医療圏にはありません。手術する病院がない地域からは、高速道路などを使って患者さんが移動しなくてはならず、地域によって医療資源へのアクセスのしやすさに隔たりがあるのが現状です。

——岐阜県、全国の医療従事者へメッセージをお願いします。

「『人生会議』をするタイミングなのでしょうか～ACP（アドバンスケアプランニング）」、「新型コロナウイルスが流行しているので病院に行くのが心配です。ワクチンの接種はどうしたらよいでしょうか」など、本書では患者さんの興味・関心が集まるさまざまな質問にも回答しています。患者さんからの質問を受けた際の回答例として、皆さまのご参考にしていただければ幸いです。ぜひご感想などもお寄せください。

肺がん治療は生活と密接に関係していて、生活や仕事との両立、妊孕性の維持、費用面の対策など患者さんは多くのことで悩んだり壁にぶつかったりするものです。そのような悩みや不安を抱えたときに本書が一つの支えになると思います。多くの病院でご活用いただき、本書が患者さんの人生に寄り添えたらと願っています。



岐阜市民病院

◆澤 祥幸（さわ・としゆき）氏

1984年岐阜大学医学部卒業。岐阜大学医学部附属病院を経て、大阪府立羽曳野病院（現大阪はびきの医療センター）で呼吸器学、特に肺がんを研修した後、1993年より岐阜市民病院呼吸科医長兼診療科長に就任。2006年、日本初のがん薬物療法専門医の1人となる。2002年より国際肺癌連盟（Global Lung Cancer Coalition）のボードメンバーとして活動。2011年より岐阜市民病院診療局長（がんセンター長）に就任（現職）。2014年より世界肺癌学会アドボカシー委員として国際的な肺がん患者支援活動にも参画するほか、日本肺癌学会理事・中部支部長を務める。

【取材・文＝加藤 由起子（写真は病院提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

